

版会, pp. 11–32.

竹下政孝 1993 「井筒俊彦のイスラーム学における業績」『イスラム世界』42, pp. 159–164.

Partin, Harry B. 1970. “Semantics of the Qur’ān: A Consideration of Izutsu’s Studies,” *History of Religions* 9(1), pp. 358–362.

Rahman, Fazlur 2002. “Review by Fazlur Rahman,” in T. Izutsu, *God and Man in the Qur’ān*. Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, pp. vii–xii.

(菊地 達也 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

**黒田祐我『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』刀水書房
2016年 x+436頁**

「レコンキスタ」は中世スペイン史の概念であるが、アンダルスのムスリム地域への軍事的進出である以上、イスラーム史研究者にとっても無縁ではないテーマである。本書は、中世スペイン史研究の視座に立ちながらも、アンダルス史研究との対話を欠かさない気鋭の研究者による著作である。本書には、評者が把握した限りで、すでに5点の書評があるが、うち3点[阿部 2017; 内村 2017; 疇谷 2018]が西洋史研究者、2点[太田 2017; 野口 2018]が中東イスラーム史研究者によるものである。いささか出遅れた感のある本稿も含めれば、ちょうど半々の比率である。本書の内容が双方の分野の関心を引くことをよく示しているといえよう。

まず、本書の内容を簡単に紹介しよう。本書は、序論に続いて、本論が全三部、そして終章と結論という構成になっている。

「序論 「レコンキスタ」の歴史と「境域」史——中世スペイン史研究の回顧と中世後期「境域」研究への視座」(第一章～第二章)では、これまでの研究史を踏まえ、レコンキスタ研究が抱える問題と本書における著者のねらいが示される。著者の整理によれば、キリスト教徒によるアンダルス征服の過程を、西ゴート王国とキリスト教信仰の再興をうたう「レコンキスタ理念」によるものと捉える伝統的な解釈には、1970年代頃から変化が見られ始めた。社会経済史的観点からの研究成果をふまえ、封建社会の成立と共に台頭してきた軍事貴族層による領土拡大意欲こそが征服の動機であるとする「新しい歴史」が登場したのである。こうした潮流に対して著者は一定の理解を示しつつも、それでもなお「レコンキスタ理念」が存在し続けたことは中世カスティーリャ王国においては否定しがたいこと、それゆえに事態は宗教対立か世俗的な対立かの二者択一では捉えきれないとする。そのうえで著者は、従来の研究が主な対象としてきた中世盛期ではなく中世後期、そして王権とその宮廷が存在する「中心」ではなくアンダルスと直接隣り合う「境域」に焦点を当てて議論を進めていくとする。

「第一部 中世後期におけるカスティーリャ王国・グラナダ王国間関係(1246～1492)——「戦争と平和」という観点から」(第三章～第七章)では、まず「中心」に焦点が当てられ、マクロな視点からカスティーリャ王国とナスル朝グラナダ王国の関係が戦争と平和の両方から分析される。両王国の関係はごく短期間の戦争と長期間の平和とから成っているが、著者によれば、だからといって両者が牧歌的な「共存」関係にあったとは言えない。中世という時代において大規模な戦争を長期間にわたって遂行することは不可能であり、休戦協定によって実現される平和は戦争と密接に関連したものであった。臣従や貢納を課す休戦協定は、グラナダ王国の弱体化や内政の不安定化を引き起こすものであり、将来的な戦争再開を見据えたものだったというのである。また、約250年間にわたる両王国の関係は14世紀後半以降に変化が見られることも指摘される。この時期にはマグリブ王朝のイベリア半島介入に終止符が打たれると同時に、カスティーリャ王国の新王朝トラスタマラ朝の歴代諸王が国内外の諸問題に忙殺され、直接グラナダ情勢に関与しなくなる。そうした中で両王国間の外交の現場では、現地情勢に通じた「境域」の民が前面に出てくるようになっていった。

続いて著者はミクロな「境域」に焦点を移す。「第二部 「境域」における「戦争と平和」——カスティーリャ・グラナダ「境域」社会の複合性」(第八章～第十章)では、近年進展の著しいアンダルシアおよびム

ルシア (いずれもグラナダ王国と境を接するカスティーリャ王国の「境域」にあたる) 地域史研究の成果を整理し直す。多くの成果を挙げてきた両地域史研究だが、そこで描かれる「境域」社会像は「戦争遂行型社会」と「平和維持型社会」の二つに分裂し、激しい論争が繰り返されている。著者は、この二つの議論の主要な論点の一つずつ丹念に検討していき、戦争遂行型社会の特質とされてきた現象 (恒常的な越境暴力、「腕つぶしの強い」入植者、軍事貴族の台頭、略奪経済など) と平和維持型社会の特質とされてきた現象 (越境騒擾解決を担う役職や制度、「平和」的な人的交流や交易など) が、実は相互に深く関わり合っていたとする。一見矛盾するように見える二つの社会像は表裏一体の関係にあったというのである。

さらに「第三部 細分化される「境域」——最前線に居住する人々の振舞」(第十一章～第十六章) では、第二部での整理をふまえ、一次史料を駆使しながらより具体例に則した形で「境域」社会の実像を描き出していく。まず、「境域」は「中心」の意図から半ば逸脱した形で戦争と平和を展開していたため「境域」における和戦は地域個別的にならざるをえないことを確認したうえで、長大なカスティーリャ・グラナダ間の「境域」を三つの地域ブロック (西方部、中央部、東方部) に分けてそれぞれの地域での和戦の展開過程を分析する。さらに、「境域」のミクロなレベルにおいて絶え間なく繰り返される戦争と平和の中で、カスティーリャ側・グラナダ側の双方で共有されるに至った「境域」特有の様々な慣習 (報復、略奪・誘拐、捕虜の扱い、局地的な「外交」交渉、境界画定、交易、放牧、改宗、「中心」の動向についての情報共有など) が論じられる。著者が描き出す「境域」社会は、「中心」の意図とは関わりなく、「境域」住民が自らの生存のために和戦を展開する社会である。頻繁に生じる越境暴力と、それゆえにこそ必要とされる暴力の抑止とによって「動的平衡状態」にあったのが中世後期のカスティーリャ・グラナダ間の「境域」であった。

「終章 「レコンキスタ」の完遂へ向けて——対異教徒認識の変遷と「中心」の決断」では、このような「動的平衡状態」にあった「境域」になぜ15世紀末に突如として変動が生じナスル朝グラナダ王国滅亡に至ったのかという、大きな疑問への解答を試みる。著者は、ラテン・キリスト教徒世界全体における対異教徒認識の変化、とりわけオスマン朝によるコンスタンティノープル征服 (1453年) を契機とする変化がイベリア半島にも及んだ可能性を指摘する。そして、その変化に対して、「レコンキスタ」完遂を意図するカスティーリャ王権すなわち「中心」が反応することで、「境域」社会の軍事力が動員されナスル朝滅亡に至ったというのが著者の見通しである。一見すると、いささか単純な議論のように見えるかも知れない。しかし、著者がこれまで論じてきたように、「レコンキスタ」理念自体は顕在化するか否かは別として常にカスティーリャ王権内部に存在していたこと、そして「境域」社会においては戦争と平和とが微妙なバランスを保っていたということを前提とすれば、この平衡状態が偶然的契機によって崩壊するということは、十分あり得ることのように思われる。もとよりこの終章は、著者自身が「この疑問に少しだけ迫ってみたい」と述べているように仮説の域を出ない論であり、今後の史料的裏付けに期待したい。

最後の「結論」では、ここまでの議論を総括したうえで、歴史上の他の地域・時代における「境域」との比較の可能性を展望して締めくくられている。

本書のもととなっているのは2013年に早稲田大学に提出された博士学位請求論文だが、その後の研究状況を反映するのはもちろん、新たな古文書館調査の成果も組み込んで全面的な修正をほどこしたものだという。著者はこれまでも多くの優れた論文を公開してきており、本書の中にはそれらを下敷きとしている箇所もある。しかし、既往の論文と全く同じものではなく、いずれも新たに書き下ろしたうえで、本書全体の文脈の中に位置づけ直している。したがって、今後、著者の研究成果を引用する際は、本書をまず参照すべきである。そのうえで、本書で省略されている細かな部分については、さらに原論文にあたるのがよいだろう。

本書を一読してまず抱く感想は、分厚い先行研究の的確な把握と、膨大な同時代史料の渉猟に基づいた、きわめて重厚な研究書だという点である。レコンキスタ研究は伝統的に中世スペイン史の中核的なテーマであり、その研究蓄積は相当なものがある。しかも本書の場合は「境域」研究という性質上、「郷土史」的な研究にも目を通さなければならない。こうして得られた研究史の見取り図は、アンダルス史研究をも視野に入れた [黒田 2009] とともに、イスラーム圏・キリスト教圏を問わず中世イベリア半島史研究に関わる者すべてにとっての道しるべになるはずである。史料についても同様である。年代記のような叙述史料のみならず文書史料なども用いるのは西洋中世史研究においては決して珍しいことではないだろうが、それにしても未公開のものも含めた証書、書簡、そして何よりも都市議事録を博搜して得られた情報量は相当のものであっ

たろうと思われる。本書の「あとがき」には「脳内が「境域」情報であふれかえり、混沌としたままの状態」で留学から帰国したとあるが、この膨大な情報を混沌のままで終わらせず首尾一貫した論旨のもとにまとめあげた著者の手腕は並大抵のものではない。取り上げられた事例の向こう側に、その何倍もの事例の存在がうかがわれる優れた実証研究である。

また、戦争か平和か、寛容か不寛容かといった安易な二者択一に陥らずに、両者が表裏一体であることを示していることも、本書の優れた点である。このような二者択一を避ける際には、ややもすると単純な「どっちもあり」という議論になりがちなのだが、著者はそれには飽き足らず、戦争と平和とがどのように連続しているのか、そのメカニズムをも粘り強く解き明かそうと試みる。そしてその試みは、かなりの程度まで成功していると思われる。例えば、報復権をめぐる議論を通して我々は、境域で頻繁に生じる暴力行為の中にはそれ以前に生じた暴力に対する報復が少なからず含まれていること、そしてグラナダ側とカスティーリャ側双方で共有される報復をめぐる慣行によって、報復行為は被った損害量に相当する程度までという制限を受け、それゆえにさらなる暴力の連鎖の抑制に貢献していることを知ることが出来る。

一方で、明らかとなっていない点もないわけではない。本書の中で著者はたびたび、カスティーリャ側の境域と同様の現象がグラナダ側にも見られたらと述べる。しかし、グラナダ側の具体的な状況がカスティーリャ側の史料に記されていないため、裏付けのない推測にとどまっているケースが散見される。例えば、休戦協定に違反した暴力行為の下手人を境界の向こう側まで追跡して所在を突き止める「足跡調査人」の任命について、著者はグラナダ側でも「同様であったと思われる」(p. 162)としている。おそらくこの推測は大筋では正しいのだろうが、具体的に誰がどのように任命するのか、その追跡報告はどのように処理されるのかなどの詳細については、カスティーリャ側の情報はあってもグラナダ側については分からないままである。

また、カスティーリャとグラナダ双方の境域社会の差異について、もう少し考慮に入れるべきではないかとも感じた。確かに、境域社会の「平和維持型社会」的な側面については、グラナダ側・カスティーリャ側の双方とも生存という目的を共有している以上、著しい差異はないかも知れない。しかし、「戦争遂行型社会」的な側面については、その限りではあるまい。実際、カスティーリャの「戦争遂行型社会」論は軍事的に弱体なアンダルス社会との対比の文脈で盛んに論じられてきたものである。こうしたカスティーリャ側とグラナダ側の差異をも踏まえたうえで、両者を統合した境域社会の全体像を描きだすことは今後に残された課題である。当然そのためには、既に指摘されているように[太田 2017: 88]、アラビア語史料の参照も必要になるであろう。

もっとも、ここから先は、本書の著者ではなく評者を含むアラビストこそが負うべき課題であろう。本書のあとがきにおいて著者は、「「キリスト教スペイン」の側からの、私のひとまずの見解をここに提示して、今後の更なる共同研究の足がかりとさせていただきます」と記している。誤解を恐れずに言えば、本書は「スペイン史からの“挑戦状”」[野口 2018: 35]でもあるのだ。

しかし、この「挑戦」に我々は応えることができるのだろうか。もちろん、ある程度は可能かも知れない。今、評者の手元にある素材の中で、本書の内容と呼応しそうな例を思いつくままに挙げれば、ジハードの勝利を喧伝するナスル朝ムハンマド5世からハフス朝君主に宛てた書簡の中には、カスティーリャ王ベドロ1世との同盟関係という裏の事情が見え隠れしているし[イブン・ハルドゥーン 2015: 47]、聖者伝史料に描かれるナスル朝の祖ムハンマド1世は、カスティーリャ王との協定で課された負担に苦悩して、聖者の奇蹟にすがる存在である[al-Qashtālī 1974: 68–69]。あるいは、捕虜解放や交易についてはファトワー史料が一定の情報を与えてくれるかも知れない[Marín and El Hour 1998]。

それでも、本書で子細に明らかにされたカスティーリャ側境域の知見に見合うような情報をグラナダ側境域に関して得られるかという点、評者は悲観的にならざるを得ない。まず第一に著者が最も具体的に描きあげることになった15世紀は、グラナダ側では年代記すら存在しない史料の空白地帯である。それ以前の時代に関しても、グラナダ側の史料の多くは叙述史料であり文書史料は絶望的に少ない。異なる史料類型から得られた両境域の社会像をどのように比較するのかといった方法論的な問題もあるだろう。

もちろん、史料の欠如を嘆くだけでは前には進まない。まずは本書の成果を踏まえたうえで既存のアラビア語史料を見直したときに、何か新たな発見が見出せないか試みるところから始めるしかあるまい。さいわ

い著者は本書を「今後の更なる共同研究の足がかり」と位置づけている。異なる背景を持つ研究分野間の対話を可能にする、まさに「境域」的な書が本書だと言えないだろうか。

<参考文献>

- 阿部俊大 2017 「書評：黒田祐我著『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』」『西洋史学』263, pp. 87–89.
- イブン・ハルドゥーン 2015 「イブン・ハルドゥーン自伝 7」(高野太輔・佐藤健太郎・湯川武・茂木明石訳註)『イスラーム地域研究ジャーナル』7, pp. 40–56.
- 内村俊太 2017 「書評：黒田祐我著『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』」『歴史学研究』957, pp. 48–51.
- 太田敬子 2017 「書評：黒田祐我著『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』」『史学雑誌』126(7), pp. 1234–1242.
- 黒田祐我 2009 「アンダルス社会から封建社会へ——農村社会構造研究とレコンキスタの新解釈」『史学雑誌』118(10), pp. 62–86.
- 嶋谷憲洋 2018 「書評：黒田祐我著『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』」『西洋史学論集』55, pp. 59–62. (評者未見)
- 野口舞子 2018 「書評：黒田祐我著『レコンキスタの実像——中世後期カスティーリャ・グラナダ間における戦争と平和』」『スペイン史研究』31, pp. 30–36.
- Marín, Manuela, and Rachid El Hour. 1998. “Captives, Children and Conversion: A Case from Late Naşrid Granada,” *Journal of Economic and Social History of the Orient* 41, pp. 453–473.
- al-Qashtālī 1974. *Milagros de Abū Marwān al-Yuḥānisī*. Fernando de la Granja (ed.), Madrid: Instituto Egipcio de Estudios Islámicos en Madrid.

(佐藤 健太郎 北海道大学大学院文学研究科准教授)

Matthew S. Erie. 2017. *China and Islam: The Prophet, the Party, and Law*. Cambridge: Cambridge University Press, xvii+447pp.

本書は、中国甘粛省臨夏市の回族コミュニティを主な対象に、イスラーム法と国家の法との関係に焦点を当て、グローバルに展開するイスラーム復興とグローバル化する中国との交差のあり様を描いた民族誌である。また、本書は人類学者でもあり、弁護士でもある著者が2013年にコーネル大学に提出した博士学位論文に基づくものである。本書から明らかになるのは、回族たちが宗教を周縁化する現代中国の法制度の中でイスラーム法に関連する要素を巧みに活性化する一方で、党国家がイスラーム法を社会の安定や経済発展を実現し、党の正統性を高めるうえでの資源とみなすという、対立的なものとして捉えられる傾向にあったイスラームと世俗主義近代国家のあいだでの相互依存的な領域の形成の諸相である。本書は臨夏市を中心とした中国西北部での2009年から2015年にかけての20ヶ月に渡る長期の現地調査に基づく労作であり、中国におけるイスラーム法に焦点を当てた最初の民族誌でもある。また、本書は2017年にアジア法社会学会 Distinguished Book Award 特別賞を受賞するなどすでに高い評価を受けている。以下では本書の内容を概観し、そのうえで若干のコメントを述べたい。

本書は序論と結論を含む以下の9章からなる。

- | | |
|-----|--------------|
| 序論 | 党国家がモスクに入る |
| 第1章 | 歴史、中国、イスラーム法 |
| 第2章 | 十字路の上の臨夏 |
| 第3章 | 儀礼的な法律戦 |